

シビルウェディング
ミニスターが語る

心にかける挙式

「わたし、シビルで挙式をしたいのですが、伊藤さん、司式者をやっていただけませんか？」

同じ職場の若い女子社員からこう頼まれた。

彼女からは、妊娠と結婚の報告は受けていたが、親が結婚式を認めてくれないと聞いていたので、「両親がゆるしてくれたんやね。良かったね。でも教会式じゃなくていいの」と訊くと、「わたし、妊娠しているからバージン・ロードは歩けない」と言う。

確かに妊娠しているという事は、バージンでない。が、

そんなことを言っていたら、昨今の花嫁の多くがバージン・ロードを歩けないことになる。それに挙式で花嫁が歩くあの場所

は、教会内のたんなる「通路」(aisle)にすぎない。あそこを「バージン・ロード」と呼ぶのは日本だけで、それも和製英語・和製造語で特別な意味はない。

そのことを説明したら「そうなんですか」と言ってから、「いずれにしてもわたしは、シビルで挙式をしたいのです」シビル挙式の受注となった

ので、私としては大満足。

結婚式当日まで2週間とせまったころになると、新婦のお腹はどんなドレスを着ても隠せないほど大きくなっていった。

当時の地方では、関係者一同がどうしたら花嫁の妊娠を列席者に知られず結婚式を終えることができるかを考える

お腹の中の赤ちゃんも参加

のが一般的であった。だが、臨月が近い彼女のお腹を隠すことはもはや無理であった。

私は、妊娠を隠すよりも挙式中にはっきりと「花嫁は妊娠しています」と言ってしまった方がいいと思い、彼女に「式の中で妊娠していることを言ってもいいかな」と訊ねました。

「いいです。見ればわかるもん」と、彼女はあっさりと言ってくれました。

了解はとったものの、さて、式の中でどのように「妊娠」を発表しようかと迷っていた。そのとき、ジュエリー関係の仕事をしている知人から「ベビーリング」というものを紹介されました。

「ベビーリング」は、生まれてきた子供にその子の誕生石で作った小さなリングをお守りとしてプレゼントするも

の……今回のケースでは、出産予定日が挙式の1ヶ月後だったので、どうしたものかと迷った結果、翌月の誕生石のリングを用意することにしました。

式当日は、さらにお腹が大きくなった新婦が、バージン・ロードならぬ「ウェディング・ロード」を、父親にエスコートされながら入場。そして、式壇の前で新郎にバトンタッチされ、2人で壇上へ。

私はいつものように列席者にシビル・ウェディングの説明をしてから、「結婚式は、列席者の皆さんが二人の結婚の証人である」ことを告げた。

新郎新婦の紹介、結婚誓約書朗読、指輪交換、誓約書署名、結婚宣言と続けたあとに「妊娠宣言」いや「ベビーリングセレモニー」をもってきた。

「ここでみなさんにもうひとつ素晴らしい報告がございます。新婦マキさんのお腹の中には、お2人の赤ちゃんが宿っています。これから生まれてくる子供も含め3人で明るく楽しい家庭を作っていくために、ここで新郎から新婦にベビーリングをプレゼントしていただきます」

ネックレス・チェーンに通したベビーリングが新郎から

新婦に渡されると、誰からともなく拍手がおこり、やがてその拍手は会場いっぱいになりました。

この挙式を通して、私は、すべてを列席者に知っていただき、かつ証人として式に列席した皆さんの賛同を得ることが大切だと思いました。

挙式というのは、型どおりに進めるのではなく、2人の結婚に対する思いをいかに表現することができるかということです。また、列席者も結婚式を「見た」ではなく「参加した」と実感するような挙式こそが、2人にとって、大きな喜びになることを学びました。



シビルウェディング・ミニスター
伊藤 保氏

(いとう・たもつ) 1958年北海道生まれ。2004年にミニスターの資格を取得。これまでは約400組の挙式を司る。



▲これから生まれてくる子供に「ベビーリング」を用意